

2014年3月11日

作成者：松浦 秀人

日本古代史では、古事記・日本書紀の枠組である近畿天皇家一元史観（日本列島の支配者は大和朝廷が唯一の王朝とみなす思考）による妄説が教科書に記述され、偽りの歴史教育が行われている。古田武彦先生は『邪馬台国』は、なかった』などの瞠目すべき探求の書を次々に公刊しその誤りを指摘しているが、学会は黙殺し続けている。名もない一市民の私たちであるが、先生の研究を支援し普及するために「古田史学の会」を結成し活動している。本冊子は、その私たちの邪馬壹国（ヤマイチコク、後述）探訪ツアーの報告である。ご笑覧を。



日本一の大注連縄（おおしめなわ）のある本殿に、まずは参拝。なだらかな坂道の途中には、二番社の稲荷神社の鳥居の朱色が鮮やかだった（同神社には八番社まである）。



冠、馬具、太刀等三百数十点、うち十数点が国宝とされるなど、考古学会では著名な古墳。



2月28日（金）21時55分、総勢19名はフェリーで松山港を発ち、翌1日朝5時に小倉港に到着。マイクロバスに乗り、朝食後に宮地嶽神社（みやじだけー、福岡県福津市）へ向かった。同所で1名が合流。

宮地嶽の山頂からは、玄界灘に浮ぶ沖ノ島、志賀島など、古代大陸交通の島々が見えるというが、時間の関係から登ることは叶わなかった。



三番社である不動神社は、江戸時代の山崩れにより「横穴式古墳」が発見され、余りの巨大さ（全長23m）は日本で2番目と副葬品の豪華さから、村人が石室内に不動尊を祀り、現在に至ったという（写真右）。

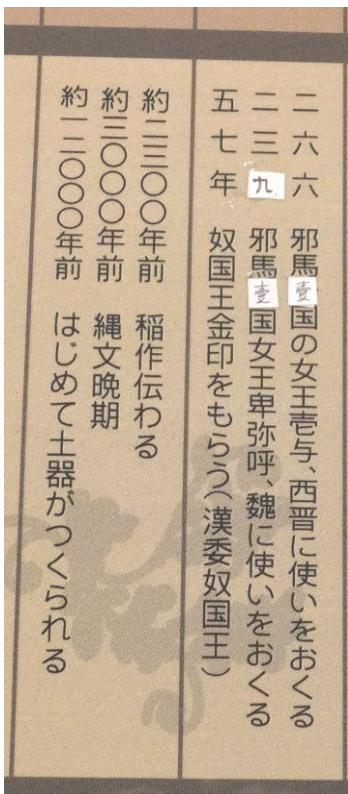
信仰の地であり、巨石で囲われた石室内に入れず遠望。出土品は、



中でも金銅装頭椎太刀（コンドウソウカブツチタチ）は、長さが3mを超える巨大なもの。復元模型の制作を終え、「国宝大神社展（九州国立博物館）」にて展示中である。

中

左は、作業中の写真だが、仰臥した人物からして、太刀の巨大さが実感できる。同神社の「筑紫舞」については、後述する。



その後、私たちは古賀市立歴史資料館に向かった。昨年4月「重文級の馬具類出土」と大きく報道された船原古墳（同市）の、その後の発掘作業の最新情報等を期待したためであった。しかし、壁新聞形式の僅かな説明の掲示のみで、この点では失敗であった。

「邪馬台国」を「邪馬壹国」に訂正した年表を発見

しかし、そこで重大な発見があった。入口付近に、邪馬台国の「台」の上に「壹」の貼紙をし「邪馬壹国（ヤマイチコク）」と訂正した年表が掲げられていた（左の写真）。発見したのは長野喜久男氏（松山市在住）で、一同驚いた。

早速に学芸員に尋ねたところ、前館長の指示によるものであること以外の事情は不明であった。なお、別の図表には「邪馬台国」の表記もあり、全館統一的に「邪馬壹国」としている訳ではない。がしかし、古田先生の所説（後述）の着実な浸透を示す顕著な事例のひとつと、一同大いに喜んだ。

ところで、船原古墳の出土品は、九州歴史資料館に全品収納済みだが、「土砂を取り除き、保存処理を施すため、一般展示は早くとも5年後」と学芸員から聞かされ、落胆しながら同館を後にした。

なお、現時点では一般には見ることの出来ない出土品の一部を、ネット上の写真から取り込んで右に紹介する。金銅の、馬の飾りである。



福岡市から太宰府市に入ると、木々に覆われた小山（人工の土塁）に出迎えられる。水城（みずき）跡である。

道路や鉄路に寸断されながらも、全長 1.2km にわたっている（左は航空写真、下は今回撮影）。基底で幅 80m、高さ 13m を超え、福岡市側の堀では幅 60m、深さ 4m の水をたたえたという。近隣の春日市や大野城市にも、小規模な水城が残存している。

通説では、白村江の戦い（662年）に敗れた大和朝廷が、唐・新羅の進攻から大宰府を守るために築いたと言う。

しかし、日本書紀の記述でも、白村江の勝者である唐・新羅連合軍は倭国（わこく）に数千人規模の駐留軍を置いている。その目の前で軍事施設を大規模な人員と期間を費やして築けるはずもなく、かつ防御の必要性自体今や消失しているのである。白村江以前にこそ、その必要性は大であった。

当時の大宰府は近畿天皇家の地方政庁でなく、倭国の都であった。九州王朝の宮殿の防塁として水城はつくられた。同種の遺構として朝鮮式山城がある。それもまた大宰府を中心に築かれているが、大和を取り巻く山城はない。





日本書紀に寄り掛り、日本列島の王朝は天皇家しかないとの思い込みが、歴史を見る目を誤らせている一例である。大宰府政庁跡は、広々としている（左写真は07年の「古田史学の会」のツアーにて）。

写真の中央奥に、石碑が建つ。下にそれを掲げる。碑には「都督府古趾」と刻印（今回の撮影）。



中国の歴史書である「宋書」には、著名な「倭の五王（讚、珍、済、興、武）」が登場する。ちなみに、古田先生によれば、5世紀の倭国王は（中国周辺民族の王者たちの、中国風の一字名称の使用にならって）一字名称を用い始めたとのことである。ともあれ倭王は中国の天子（南朝）に臣従し、代々繰り返して「都督」の号を求めている。その都督とは、臣下の最高位である。即ち、都督府とは倭国内のベストワンの政庁である。また、日本書紀などにおいても、大宰府以外に「都督」の記述はない。

また、「宋書」で最高位の「三司」とは、「太宰（たいさい）、太傅（たいふ）、太保（たいほ）」の三つを指し、それらが「府（役所）」を開くと「太宰府」とか「太傅府」とか呼ばれていたはずで、太宰府の地名もそこに由来する可能性が濃厚なのだ。ちなみに、日本書紀などに倭の五王に対応する記述は皆無で、五王が近畿天皇家に属していないことを示している（天皇家の祖先なら麗々しく記述するはず）。



ところで、「九州」とは、中国の王朝では、天子のいる「天下」を意味する政治用語であったことをご存知だろうか。四国は四つの国があるから四国だが、筑前、筑後、肥前、肥後など九つの国を意味するなら、「九国」と呼べば良いはず。

5世紀には南朝（中国）に臣従していた倭国だが、南北朝の争いの末に北朝の隋が統一を果たすや、7世紀には同じ蛮族としての隋に「日出ずるところの天子云々」と、対等な立場の国書を送った。

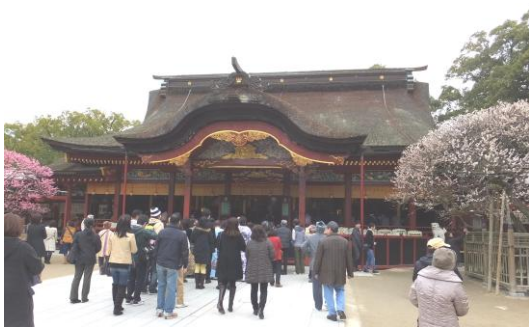
その国書を送った天子は、博多湾岸近郊に所在した3世紀の邪馬壹国の女王倭姫呼

（ヒミカ。通説では卑弥呼、ヒミコ）と同一の王朝であると、古田先生は喝破した（左は政庁跡の礎石）。

何故なら、三国志以降の中国の史書である宋書、隋書等が倭国の王朝交代を記さず、前代からの継続を前提とした記述を重ねているからである（仮に王朝交代の重大事態が発生した場合、それを記さない史書はありえない）。



事実「旧唐書」には倭国伝と並んで日本国伝があり、王朝の交代を告げている。
大宰府は、その九州王朝の、ある時点の都であった。



マイクロバスは、九州国立博物館（右の写真）の駐車場に向かった。同博物館は、山の上に立地し、動く歩道と巨大なエスカレーターで麓を結んでいた。

昼食のため、近くの太宰府天満宮を通り抜けた。菅原道真を祀る「天神さん」である。この日、梅の花が満開で、馥郁（ふくいく）たる香りに包まれる幸せを得た。「東風（こち）吹かば」で著名な、飛び梅も満開であった（左写真の右端）。

昼食後の「菅公歴史館」は説話中心で、史実性に乏しい人形展示館であった。



復路に又、天満宮を通り抜

けた。紅梅、白梅を愛（め）でながらの道筋を、ここに写真で再現する。これほど見事なタイミングで、満開の梅の花に出遭うことはまずない（大政氏の弁）。季節の神様に感謝した。

14時、九州国立博物館に集合し、古田先生や東京・関西の古田史学の会員諸氏と企画展「国宝大神社展」を見学した（撮影禁止で、館内は掲示できない）。振り返ると、仏像を見る機会は多かったが、神像をこれほど見たのは初めてである。それにしても国宝を、これほどまでに一挙によく集めたものと感心した。古事記最古の写本である真福寺本も、初めて見た。その後、「常設展」も見学したため、ヘトヘトであった。前夜に船中で盛り上がり、2～3時間しか眠らなかったためである。



夕食は、阿部副会長の挨拶と乾杯から始まった（左）。

船中でもバスでもホテルでも、あれこれと和やかな意見交換。話し込むのが、私たちのツアーの醍醐味だが、この日は誰もが睡眠不



足で2時間余の早仕舞いの宴となった。

右上は、今回参加の歴女5名全員。



2日(日)は観世音寺の宝蔵の見学からスタートした。進入路には、風情のある石碑があった(写真左)。長くはないが、参道(写真右)とその周辺にも、趣があった。



宝蔵に入って驚いた。重要文化財の仏像が多数安置され、高さが5mもある馬頭観世音菩薩増立像などの巨大な仏像が、幾つも佇立していた(撮影禁止で紹介できないことが残念)。仏像の制作年代は、平安～鎌倉期であるという。九州王朝の滅亡(701年)から数百年の後の平安～鎌倉期においても、当寺の威信が高かったことが伺える。



梵鐘は日本最古。また音色も優雅とのことで、国宝である(左)。京都の妙心寺の梵鐘と兄弟関係(同一鑄型)であることも著名だ。



なお、残された絵図から、かつて七堂伽藍の広大な寺院であったことも知られている。

法隆寺の炎上・再建論争ともかわりながら、法隆寺は当寺の移築との有力な説がある。これには、古田史学内部でも賛否両論があると聞いている。

いずれにせよ同寺が倭国随一の寺院であったことは疑いがないと、改めて痛感した。

左は、ツアー参加者全員の揃い踏み(観世音寺にて)。ただし、左の写真の解像度は落としている。



九州歴史資料館(小郡市)の見学は、船原古墳出土の馬具類の一部でも展示していないかとの淡い期待からの計画だった。

古賀市立博物館の学芸員は「早くても5年」と言ったが、当館では「10年を要する」とのこと。それでも未練たらしく館内を歩き回り、整理中で山積みされた出土物の中から「船原古墳」とマジックインキで記されたビニール包みを、ガラス越しに眺めた一同であった。

それにしても当館の「光学研究室」等の文字板を見て、資料館や博物館が市民向けの展示・普及サービスばかりでなく、研究・保存拠点の機能を有していることを改めて思い知った。

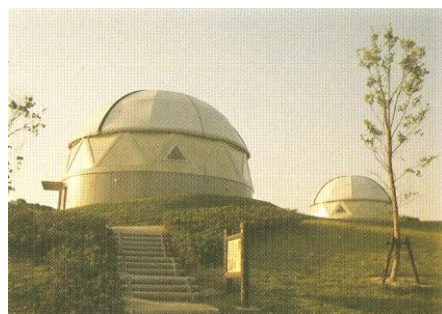


「奴国（なこく）の丘歴史資料館」は、春日市にある。近畿に出土例のない、鏡・剣・勾玉の「三種の神器」が出土した須玖・岡本遺跡の近傍に建つ。

敷地内に甕棺墓の出土現物そのものを、ドーム上の覆いを設け保存展示している（右下はその外観）。



展示品は豊富で、銅鐸などの青銅器類はむろんのことその鋳型もある。近くには、当時のハイテク工場である青銅器工房跡もある。聞けば、隣接地（左写真）はまだ発掘されていないと言う。掘れば、何が出てくるのだろうか？



古賀市立歴史資料館でも感じたが、失礼ながら市レベルの資料館だが、展示品は素晴らしく豊富である。この地が古代の王城の地、九州王朝の中心域であることを出土品自

身が物語り古田史学の正しさを裏付けていると、私は感じた。

古田先生の記念講演と筑紫舞 超満員の 800 席



2日15時からアクロス福岡（左のビル）で、記念講演と筑紫舞の披露があった。これは、「国宝大神社展」の関連イベントで、九州国立博物館などの後援を得て、筑紫舞再興30周年記念に宮地嶽神社が主催したもの。

開会前から長蛇の列が並び（写真右）、800席の会場は超満員になった。

冒頭、宮司である浄見譲（きよみー）氏が、主催者として挨拶（下）。



日ごろの古田史学の講演会では見られない和服姿の女性もチラホラ（写真右の手前）、筑紫舞の鑑賞目的と思われた。

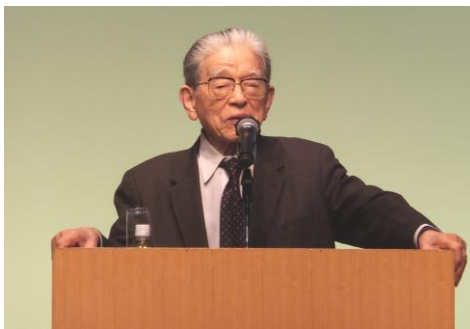
第一部は、九州国立博物館展示課長の赤司善彦氏の「よみがえった宮地嶽古墳黄金の太刀」の講演。第二部が、古田先生の講演「筑紫舞と九州王朝」、第三部が筑紫舞の披露である。



演壇に立った古田先生（87歳）は、カクシャクとしておられた。声にも張りがあった。以下、つたないながら、要旨を紹介する。

講演は、「日本の歴史学は間違っている」から、始まった。

魏志倭人伝には邪馬壹国と明記してあるにもかかわらず、邪馬台国と勝手に読み替える。多くの論者の中で、その理由をアケスケに述べたのは江戸時代の松下見



林である。その松下は、わが国には史書として古事記、日本書紀があり、天皇家はヤマトに住まいしているのであるから、ヤマトと読むことが可能な「台」を正とし、「壹」を誤としたと明言する。

即ち、あらかじめ結論を決めておいて、それに合うように原文を改定するのである。これは学問ではない。自分はその方法をとらない。原文に邪馬壹国とあるのだから、邪馬壹国とするという立場である。

女王倭弥呼（ヒミカ）が、魏朝に差し出した国書には国名が記載され、晋朝の史官である陳寿がそれを見たことは疑いが無い。陳寿は、国書にもとづいて「邪馬壹国」と記した。これを無視し、「邪馬台国」と改定するなど許されない。

一方、古事記にはそうした外交関係の記述は全くない。また日本書紀はそうした人物を神宮皇后に当てはめようとしているが、邪馬壹国という国名も倭弥呼という人名もない。従って、倭弥呼が近畿天皇家の人物でないことは明白である。

次に、「日出るところの天子」の国書に、講演は進んだ。教科書では推古天皇が送ったとしているが、記紀には記載が一切ない。隋書にはその記述があるが、送り主は多利思北孤（タリシホコ）と記され、その妻の名前も記述されていて、推古女帝と無関係であることは明らかである。7世紀に隋と交流した国は、近畿天皇家ではなかったのだ。



漫画「『邪馬台国』はなかった」から転載

現在の歴史学は、これらの矛盾に回答できない。そういうやり方に、終わりが来つつある。

講演は、資料館・博物館の「あるべき姿」へと進んだ。対立する見解があれば、その一方だけでなく、他方の見解も並べて紹介する公平で開かれたものとなって貰いたいと



要請。その中で、私たちが発見した古賀市立歴史資料館の「壺」の貼り紙についての紹介もあった。

次に筑紫舞(写真上)に言及。昭和 55 年 5 月の舞踊家西山村光寿齊さんとの出会いから始めて、宮地嶽古墳に行き着くまでの経緯を簡単に述べ、詳細は偶然にもこの日が発売日となった復刊版「よみがえる九州王朝—幻の筑紫舞 (ミネルヴァ書房)」を読んでもらいたい、と結んだ。



学校でみなさんが習った歴史は、残念ながら本当の歴史ではない。明治時代に薩長政権が、自らの政治目的のために「万世一系」の概念でつくり出したもの。今こそ本当の歴史を再建する時代に入ったとも、強調された。

最後に、これまでの自分の人生が多くの方々に支えられた幸せに感謝を表明され、命尽きる時には地獄へ行きたいとのこと。

地獄では、無差別殺人の犯罪者などに寄り添い、何故どうして犯罪や自死に至ったのかを徹底的に調査したい、逝去の報をお聞きになったら、古田はあの世で忙しくしていると思って下さいと、意表をつく発言で講演を終えられた。

第三部は、筑紫舞。最初は、宮地嶽神社の権禰宜(ごんねぎ)5名の「笹の露」。フィナーレは、5名の伴奏で浄見宮司による



一人舞の「神無月の舞」であった。



芸能分野の、まして舞踊の知識は皆無で論評のしようもないが、毎年 10 月に境内で奉納するという。この舞いを義務付けられるなら、神職になるのも容易でないなあと思いながら舞台を見ていた。

この筑紫舞が、九州王朝の天子への奉納に淵源を持つことを、80 年代に古田先生は解明された。即ち、それは中国の天子が、周辺部族制圧を誇示する目的で行った「四夷の舞(東西南北の蛮族の舞)」を取り入れた、その九州王朝版であったのだ。



宮地嶽古墳出土の、黄金の太刀復元模型が舞台にあったことを、終演後に知った(左最下端)。ただし、これは九州国立博物館展示品と違い、外装のみの復元で刀身部分は竹光とのことであった。

19 時に終演。やや遅目の夕食の後、一目散に小倉港に向かった。21 時 55 分発のフェリーに乗船。船内のミーティングルームで遅くまでツアーの感想や疑問、意見など楽しく述べ合った。そ

ここでは観世音寺の巨大仏像への感嘆の声が目立った。また、会員でない参加者から、観光ツアーと違って学ぶことが多く、ためになったなどの感想も出された。

翌3日（月）早朝5時、フェリーは松山港に着岸し、旅は終わった。

古田武彦先生の著作の紹介 一読をお勧めする（なまじな小説より数段面白いこと請負いです）

『『邪馬台国』は、なかった』、「失われた九州王朝」、「盗まれた神話」など多数。

（近時いずれもミネルヴァ書房から復刊され、一般書店で入手容易）ぜひ一読下さい。